



好学愛知 自律敬愛 質実剛健

鶴丸イ言

鹿児島県立鶴丸高等学校

〒890-8502 鹿児島市薬師二丁目1番1号

TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433

http://www.edupref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

克己 教頭 前田 光久

携帯電話が日常生活の中に当たり前のツールとして入り込んで久しい。電話であるのももちろんそれまでの固定電話と同じように距離の離れた者同士がリアルタイムで会話をする機能がメインであるのだから、それ以上にそのメール機能は、他者との距離をずいぶん縮めることになった。

確かに数字は忘れたが、明治以来今日ほど日本人が書き言葉で情報を発信する時代はないと言われている。複雑化する現代社会の中で、他者との繋がりが有意義味遠になりがち。今日、我々人間はどこで誰かと「繋がっている」という証を実感してみたい。メールという理由もなすけずける話である。

発信者に対する返事がすぐに返ってこなくても、それはそれで当然と思えるのだが、そこは携帯電話というツールの特性からして返信を待ちきれない場合もあるらしい。逆に受け手の側からすれば、どんなに多忙であるとしてもわずかの時間で返信できるのだからすぐに返信しなければ相手に不快感を与えてしまうのではと焦燥の念に駆られてしまったりもするようである。

便利さに振り回されて逆に自分を縛っているとしたらこれほど残念なことはない。物事に即応することはない心地よく、しかるべき姿なのかと疑ってみたいもなる。便利さを否定するつもりなど毛頭ないが、電子メールや携帯電話がなかった時代の他者との距離感が懐かしさを感じる。

誰かと繋がっていたいという気持ちがこれほどまでにあからさまになる時代とは、裏を返せばそれだけ自分自身を確かな存在として実感しづらいついてきた時代でもあるのだ。若い世代ならなおさらのことであるかもしれない。

ところで、受験は団体戦であるという。不安と緊張の連続する毎日を目指に向かって邁進しなければならぬ時、同じような立場の仲間と共に必死になってゴールを目指すので

ある。あとわずかで離ればなれになる友が、今自分の傍らで奮闘している。その姿が自分自身を奮い立たせ、集中力をかき立てる。そしてそれが周囲への奮闘の連鎖となり、一つの集団が個々人の力だけで達し得ない突破力を生み出すのである。

しかし考えてみると、試験本番で友と協力して回答することは不可能だし、受験生二人がセットで合格できるわけでもない。当たり前のことであるが、受験は個人戦でもある。

昼間、学校で決められた演習計画に沿いながら取り組むことは当然である。が、夜、机に向かっている一人黙々と問題に立ち向かうその時間こそが、勝負だと思える。季節は真冬である。あえてその寒さに逆らわず、ひんやりとした空気の中に身を置いて、かじかむ手指に息を吹きかけながら鉛筆をすり減らしていく時間。

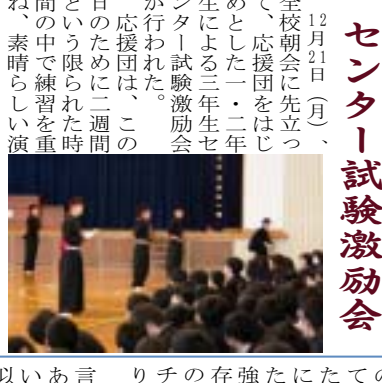
家族が床に就くまで、一人投げ出し続けるような難問に立ち向かい、眠い目を擦りながらも一問、またもう一問。まさに一心不乱に前のめりで格闘する時間。なぜこんなに苦しくて辛い思いをしなればいけないのかなどと泣き言をつぶやいても誰も手を貸す者などいない。貴方のメール相手は手を貸してはくれない。

でもそれが受験勉強なのであり、そしてそれは幸せなことでもある。こんなにも無心にならざるを得ない。こんな相手など、人生の中でそう多くはないのだから。

今、まさにその試験の真っただ中にある諸君は、人生の中でこんなにも自分自身の力で必死になって突き進む瞬間を否応なしに味わっている。大げさな言い方かも知れないが、これまでの十数年間の己の全てが試されている。もがき苦しんでほつぽり出したくなって楽な道へ逃げたくなる。早々と出口を見つけた者を恨めしく思ってしまうことさえある。大声で叫んだり、無性に駆け出したり、息抜きも必要だとばかりに快楽の中にどっぷりと浸かりたくなることもある。しかし、

常に頭の中には、自分でやらねばどうしようもないことなのだとの思いが厳然としてこびりついている。他人は騙せても自分に嘘はつけない。自分自身の有り様は自分が一番よくわかっているのだ。苦しい自分に必死になって向き合いつつ、どこか自分を追い込んで欲しい。そして受験の日、渾身の力でもって答案を書き上げ、全てを出し尽くした満足感を胸に会場をあとにして欲しい。そして、晴れ晴れとした気持ちで帰って来て欲しい。そしてそれからである。「全力を尽くしました」と誰かに告げたいのである。それはもちろんメールでもあっていいのであるが、それまでとことん自分を追い込んだ諸君ならば、きつと誰かに面と向かい報告したくなるのだと思う。それまでとわずか。ゴールは近い。

センター試験を終了した一・二年生による三年生センター試験激励会が行われた。この日のために二週間という限られた時間の中で練習を重ね、素晴らしい演舞を披露してくれた。



1月16日・17日の両日、鹿児島大学などで大学入試センター試験が実施された。あらかじめ受験を予定していた三年生全員が、大きな混乱もなく無事に受験を終えることができた。今回は二年生の応援団団長である池田夏一君に、あらためて三年生へメッセージを書いてもらった。

三年生へ 応援団団長 池田夏一

センター試験も終えて、いよいよ二次試験対策が始まったからでありましょう。先輩方一人一人が覇気に満ち溢れているように思います。近頃ではすれ違うだけで背筋がびんと伸びるような感覚さえ覚えます。

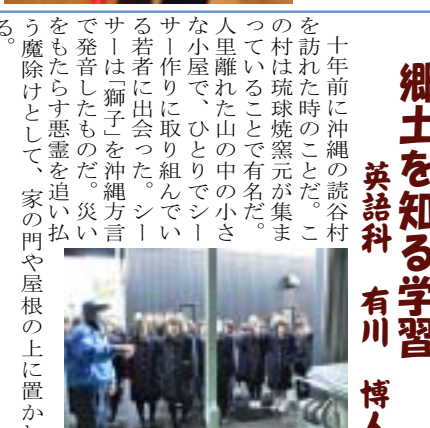
つい先日、JR通学の私は早起きしたついでに始発列車に乗って登校しました。その時も鶴丸高校の三年生が何人か乗っていた、朝早くの非常に眠たい時間であり、また、揺れる車内であるにも関わらず、必死に勉強する姿を見たときはとても驚きました。そして、先輩方の受験に対する思いの強さを改めて感じました。大学入試は、ご存じの通り、三年前の高校入試とは比べものにならない全国レベルの争いになります。チーム鶴丸として一致団結してこの冬を乗り越えてください。

私の好きな言葉に「あすなる」という言葉があります。言葉といたら語弊があるかもしれませんが、「あすなる」というのは、ヒノキ科の植物で、樹とよく似ていますが材質的に樹より劣っているため、「明日は樹になる」といっても思っている植物だと言われています。もしなしたかも先輩方も今はまだ「あすなる」なのかもしれません。しかしこの冬、シアードでストイックな生活を送り辛い勉強にも耐え抜いた先輩方は、春にはきっと樹になっていることだと思います。私たち一・二年生は先輩方の背中をずっと見ています。最後までがんばってください。

十年前に沖縄の読谷村を訪れた時のことだ。この村は琉球焼窯元が集まっていることで有名だ。人里離れた山の中の小さな小屋で、ひとりどいサー作りを取り組んでいる若者に出会った。サーは「獅子」を沖縄方言で発音したものだ。災いをもたらす悪霊を追い払う魔除けとして、家の門や屋根の上に置かれる。

彼は大阪出身で、学生の時に琉球焼に魅せられて移住してきたのだそう。その頃はまだ未熟で、なかなかうまくできなと言っていたが、サーの顔がとても表情豊かだったので、頑張ってほしいと思っ、いつかこの人の作品を手に入れたいと思った。実は、それが最近かなったのだ。そのユーモラスな姿が、我が家の中庭で存在感を示している。最近、彼は有名な作家になっていくという。人はさまざまなかで、その後の人生を決める。12月18日の一年生の恒例の「郷土を知る学習」は、もしかしたら、そんな機会になったかもしれない。たとえば、工業試験所では、鹿児島の特産物を生かした、いろいろな「もの」の作りについて知ることができた。龍門司焼の窯元では、約四百年前の慶長の役の朝鮮出兵の時、島津義弘が連れ帰った陶工たちによって、今日の礎が築かれたという歴史を知ることができた。実際にろくろを回し、器作りを体験した生徒たちの中には、ひよっとした将来、陶工を目指す人もいられるかもしれない。ともあれ、とても夢のある「郷土を知る学習」の旅だった。

また、空は高く青く澄んで、遠く霧島連山の主峰高千穂が冠雪し、美しい景色を堪能することもできた。ただ、折しも寒波の襲来で、その寒さは半端ではなく、後日風邪で学校を休んだ人もいると聞く。そのこともまた、高校時代のよき思い出になるだろう。

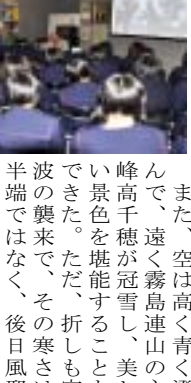


郷土を知る学習 英語科 有川 博人

2月の行事予定

Calendar table for February with columns for date, day of the week, and event name.

うがい・手洗いを 鹿児島県に、感染性胃腸炎の流行警報が発令されました。うがい・手洗いの励行により各自予防に努めましょう。また吐物からも感染するので適切な処理を行いましょう。



また、空は高く青く澄んで、遠く霧島連山の主峰高千穂が冠雪し、美しい景色を堪能することもできた。ただ、折しも寒波の襲来で、その寒さは半端ではなく、後日風邪で学校を休んだ人もいると聞く。そのこともまた、高校時代のよき思い出になるだろう。